

金口イオアン聖体礼儀（輔祭なし）

【重聯禱】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い
我等皆 靈 を 全 うして曰わん、我等の 思 を 全 うして曰わん、

司祭) しゅぜんのうしゃ われつそ かみ なんち いの き い あわれ
全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて 懐めよ、

司祭) 神よ、爾の大なる 懐に因りて我等を 懐めよ、爾に禱る、聆き納れて 懐めよ、

司祭) またわくにてんのうおよくにつかさどものためいの
又我が國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、

司祭) またきょうかいつかさどそんきわれらぜんにほんふしうきょう
又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於

ことごとくの我等の兄弟の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあ憐 われめ よ。

主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわら けいてい しょしさい しょしゅうどうしさい およ わら しゅうけいてい
又 我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の
ため いの 禱る。

しゅあわれめ、しゅあ憐 われめ、しゅあ憐 われめ よ。

主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ およ
又 恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正教の総主教、この聖堂の建立者、及
び已に寝りし 悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に
いの 禱る。

しゅあわれめ、しゅあ憐 われめ、しゅあ憐 われめ よ。

主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこ しそん せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ
又 此の至尊なる聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此
に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあ憐 われめ、しゅあ憐 われめ よ。

主 憐 主 憐 主 憐

(※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。)

司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに因

りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の

民に遣し給え、)

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

も何時も世世に、



【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



司祭) 真實の言を以て彼等を啓蒙せん、

司祭) 義の福音 經を彼等に啓かん、

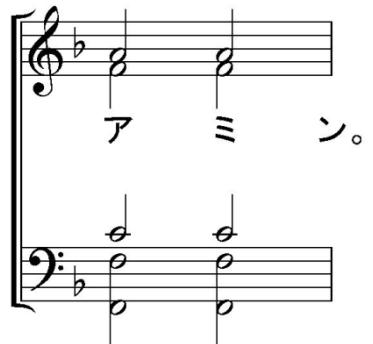
司祭) 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、

司祭) 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) 黙誦：主我が神、高きに居り卑きを臨み、爾の獨生子・神・我が主イイススハリ
 つかわ にんげん すくい もの なんぢ ぼく けいもうしや そのこうべ なんぢ
 ストスを遣して人間の救となしし者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を爾
 かが もの かえり とき したが かれら ふくせい よくばん しょざい ゆるし ふきゅう
 に屈めし者を顧み、時に隨いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不朽
 ころも たま かれら なんぢ せい こう しと きょうかい いつ かれら なんぢ えら
 の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教會に一にし、彼等を爾の選
 むれ あわ たま
 ばれたる群に合せ給え、)
 司祭) ねがわ かれら われら とも なんぢちち こ せいしん しそんしえい な さんよう いま いつ
 も世世に、



【信者の聯禱1】

司祭) しゅうけいもうしやい けいもうしやい しゅうけいもうしやい けいもうしやひとり ただしん
 衆 啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆 啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信
 者 復又安和にして主に禱らん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、

The musical notation consists of two staves. The top staff uses a G clef and has lyrics: "しゆ 主 あ憐 われ め よ。". The bottom staff uses a bass clef and has lyrics: "わ れ ら め よ" (repeated). The music is in common time.

司祭) 睿智、

司祭) (黙誦: 主、萬軍の神や、爾が我等に、今も爾の聖なる祭壇の前に立ち、爾の慈憐に俯伏し、我等の罪と衆人の過との爲に祈禱するを赦し給いしを爾に感謝す、神よ、我等の禱を納れ、我等を爾が衆人の爲に、爾にいのりねがいむかつまつりけんたるものたまわれらなんぢせいしん祈と願と無血の祭とを獻ずるに勝うる者となし給え、我等爾が聖神のちからこなんぢほうじためたものていざいつまづきそのりょうしん潔き證を以て、何の時何の處にも爾を籲ぶに適う者となして、爾われらきなんぢあいれんおおよよわれらためじんじものいた我等に聽き、爾が哀憐の多きに依りて、我等の爲に仁慈の者となるを致せ、)

司祭) 蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

The musical notation consists of two staves. The top staff uses a G clef and has lyrics: "ア ミ ン。". The bottom staff uses a bass clef and has lyrics: "ア ミ ン" (repeated). The music is in common time.

【信者の聯禱2】

司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、

司祭) 睿智、

司祭) (黙誦: 善にして人を愛する主や、我等復且數爾に俯伏し、爾に禱る、我等の
いのり かえり われら たましい からだ およ にくたい れいしん けがれ いさぎよ
の 禱を顧みて、我等の 灵と體とを凡そ肉體と靈神との 穢より 潔
くし、我等に、玷なく、定罪なく、爾の聖なる祭壇の前に立つを賜え、神
や、我等と偕に祈禱する者にも、生命と信と屬神の智識との進歩を與え給え、
かれら つね おそれ あい もつ なんち つと きず ていざい なんち せい
彼等が常に畏と愛とを以て爾に務めて、玷なく、定罪なく、爾の聖機
みつ う なんち てんごく い た もの え たま
密を領け、爾の天國に入るに勝うる者となるを得せしめ給え、)

司祭) 我等常に爾が權柄の下に護られて、光榮を爾父と子と聖神に獻するが爲なり、

いま いつ よよ
今も何時も世世に、

【 ヘルヴィムの歌 】

わ我れら等慎つしこんでヘルヴィムにのつと則

りヘルヴィムにの則つとり

せ聖いさんんのう歌たをい生のち命をほ施ど

こすのせ聖いさんしやにたてまつり

て

このよのつとめをし退りぞくべ可し



司祭) (黙誦: 肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大におそして畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性を易えず失はずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰なる縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、爾は獨天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィムの主、イズライリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾獨善にして善く納るる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が靈と心とを邪なる思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、爾が聖神の力に藉りて、此の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨なる聖體至尊なる聖血の機密を行うに堪うる者となし給え、蓋我首を屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却くる勿れ、乃我罪有りて當らざる爾の僕に此の祭物を獻ぐるを致させ給え、蓋ハリストス我が神よ、爾は獻する者と獻ぜらるる者、受くる者と頒たる者なり、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施する者なり、爾の神とに獻ず、今も何時も世世に、)

司祭) (默誦: 我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、いま此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有の主を戴かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。

われらおうみつ
我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこの世のよおもんばかりことごとしおりぞべてんしぐんみになたてまつばんゆう
今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有

の王を戴かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。

われらおうみつ我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、今

こよおもんばかりことごとしおりぞべてんしぐんみになたてまつばんゆう
此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有の

おういただ王を戴かんとするに縁る、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。)

【 大聖入 】

司祭) ねがわしゅかみそのくにおいわくにてんのうおよくにつかさどものつねきおく
願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を司る者を恒に記憶せん、

いまいつよよ
今も何時も世世に、

ねがわしゅかみそのくにおいきょうかいつかさどそんきわれらぜんにほんふしゅきよう
願くは主・神は其國に於て、教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教

セラフィムを恒に記憶せん、いまいつよよ
今も何時も世世に、

ねがわしゅかみそのくにおいすでねむふしゅきようふしゅきようふしゅきよう
願くは主・神は其國に於て、已に寝りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府

しゅきようふしゅきようふしゅきようふしゅきよう
主教ウラディミル、府主教フェオドシイ、府主教ダニイル、大主教ニコライ、主

きようしゅきよう
教ニコライ、主教ペトル、(およこときおくわれらすでねむかぞく
及び殊に記憶せらるる某) 我等の已に寝りし家族、

けいていしまいもろもろえんしゃほうゆうらつねきおくいまいつよよ
兄弟姉妹、諸の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

ねがわしゅかみそのくにおいなんぢしゅうせいきようらつねきおく
願くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストニアニ等を恒に記憶せん、

いまいつよよ
今も何時も世世に、



司祭) (黙誦: 尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、淨き布に裹み、香料にて覆

い、新なる墓に藏めり、

ハリストスよ、爾は神なるにより、體にて墓に在り、靈にて地獄に在り、

右盜と偕に天堂に在り、父と聖神と共に寶座に在り、限なき者として一切

を満て給えり、

ハリストスよ、我が復活の泉たる爾の墓は、生命を施す者、地堂より美

しき者、實に如何なる王の宮よりも耀ける者と顯れたり、

尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、淨き布に裹み、香料にて

おお覆い、新なる墓に藏めり、

主よ、爾の惠に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給

え、其時に爾義の祭、獻物と燔祭を喜び饗けん、其時に人人爾

の祭壇に犧を奠えんとす、)

【 増聯禱】

司祭) われらしゅ まえ わ いのり まくわ
我等主の前に吾が 禱を増し加えん、

しゅあわれめよ。

司祭) ささ とうと さいひん ため しゅ いの
獻げたる 尊き祭品の爲に主に禱らん、

しゅあわれめよ。

司祭) こせいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの
此の聖堂、及び信と 慎と神を畏るる 心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、

しゅあわれめよ。

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの
我等諸の憂愁と忿怒と危難とを 免るが爲に主に禱らん、

しゅあわれめよ。

司祭) かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い 懐み護れよ、

司祭) 此の日の 純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、

司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、

司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

しゅ
主
た
賜
ま
え
よ

司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ
主
た
賜
ま
え
よ

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の 終 がハリストニアニに適い、疾 なく、耻 なく、平安なること、及びハ
リストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、

しゅ
主
た
賜
ま
え
よ

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい だよさい しょうしんぢょ えいていどうぢょ
至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、
しょせいじん きおく われら おのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等
いのち もつ かみ いたく
の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ
主
な
爾
んぢ
に

司祭) 黙誦: 主・神・全能者、獨聖にして心を盡して爾を讃美する者より讚美の祭を
 受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、
 我が罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに勝
 もう者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は爾に
 善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の供えら
 れたる祭品と爾の衆人に居るを致させ給え、)

司祭) 爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と
 ともあがほめ讃めらる、今も何時も世世に、



【ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經】

司祭) 衆人に平安、



司祭) 我等互に相愛すべし、同心にして受け認めんが爲なり、



かれざるせ いさんしや を

司祭) 黙誦: しゅわれ ちから われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ ちから
主我の力 よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の力
われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ ちから われなんぢ
よ、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、主我の力 よ、我爾を
あい しゅ われ かため われ かくれが
愛せん、主は我の防固、我の避所なり、)

司祭) 門、門、敬みて聽くべし、

もん もん つつしき
われしんず、ひとつのかみ ちせんの うしゃ、てん
我信 一 神父 全能 者 天
とち、みゆるとみえざるばんぶつをつくりし
地見 見見 萬物 造
しゅ を、またしんず、ひとつのはじイイススハリストス
主 又信 一 主
かみのどくせいいのこ子、よろづよのさきに
神獨生 子萬世 前
ちちよりうまれ、ひかりよりのひかり、まこと
父生 光光 真
とのかみよりのまことのかみ、うまれし
神真 神 み
ものにてつくられしにあらず、ちちといつ
者造 非 父 一
たいにしてばんぶつかれにつくられ、われ
體萬物 彼造 我

らひとびとのため、またわ我らのすくいのた爲
 等人 人 爲 又 我 等 救 爲
 めにてんよりくだり、せいしんおよびどうて貞
 天 降 聖 神 及 童 貞
 いちよマリヤよりみをとりひととなり、わ我
 女 身 取 人 と な り 、 我
 れらのためにポンティピラトのときじゅうじかに
 等 爲 時 十 字
 くぎうたれ、くるしみをうけほほうむら
 釘 苦 受 葬
 れ、だいさんじつにせいしょにかないてふく
 第 三 日 聖 書 應 復
 かつし、てんにのぼり、ちちのみぎにざ
 活 天 升 父 右 坐
 しこうえいをあらわしていけるものとせ
 光 荣 顯 生 きる 者 の と し 死
 しものとをしんぱんするためにはまたきたり、
 者 審 判 爲 還 来
 そのくにおわりなからんを、またしんず、せ
 國 終 信 聖
 いしんしゅいのちをほどこすものちよりい
 神 主 生 命 施 者 父 ちより出
 で、ち父 お及 よびこ子 と共 もにお拜 がまれほめら
 て、ち父 お及 よびこ子 と共 もにお拜 がまれほめら

れ、よげんしやをもってかつていいしを、また
 預言者以嘗言

しんず、ひとつのせいなるおおやけなるしとの
 信一聖公使徒

きょうかいを、われみとむ、ひとつのせんれ
 教會我認洗禮

い、もってつみのゆるしをうるを、われの
 以罪赦得我望

ぞむしあのふくかにつ、ならびにらいせい
 死者復活並來世

のいのちを、アミン。

【 アナフォラ 】

司祭) 正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる獻物を奉らん、

へいわのあ懺われみさ讀んよ揚うのま祭つり

を

司祭) ねがわわしゅめぐみかみちちいつくしみせいしんしたしみなんぢしゅう
 願くは我が主イイススハリストスの恩、神父の慈、聖神の親は、爾衆
 人と偕に在らんことを、

な爾 んち の し神 んと も

司祭) こころうえ むか 心 上に向うべし、

しゅ 主 にむ向 え り

司祭) しゅ かんしゃ 主に感謝すべし、

ち父 ち と こ 子 と 聖 い し神 ん、 いつた體 い に し て わ 分

かれざるさんしゃに ふし お拜 が むは と當 うぜ然 んに
三者 伏 三者 お拜 穏然

して ぎ義 な り 。

司祭) (黙誦: なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさい
爾 を歌 頌 し、 尔 を讃揚 し、 尔 を讃美 し、 尔 に感謝 し、 尔 が一切
おさ ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ どくせい
治むる處 に於て 尔 に伏し 拜むは當然にして 義なり、 蓋 尔 と 尔 の獨生

し なんち せいしん い がた し がた み べ はか べ なが あ
 子と 爾 の聖 神は、言い難く、知り難く、見る可からず、測る可からず、永く在
 つね かわ かみ なんち われら む ゆう おちい もの またおこ
 り、恒に變らざる神なり、爾は我等を無より有となし、陥りし者を復起し、
 およ われら てん のぼ なんち らいせい くに たま いた ばんじ おこな
 及び我等を天に升らしめて、爾が來世の國を賜うに至るまで萬事を行い
 や これら ため およ われら し ところ し ところ あらわ ところ あらわ
 て止めず、此等の爲に、凡そ我等が知る所、知らざる所、顯れし所、顯
 ところ われら たま しょおん ため われらなんち なんち どくせいし なんち
 れざりし 所 の我等に賜わりし諸恩の爲に、我等爾と爾の獨生子と爾の
 せいしん かんしや またこ ほうじ ため なんち かんしや なんちこれ われら て う
 聖神とに感謝す、又此の奉事の爲に爾に感謝す、爾之を我等の手より領
 あまん たま しか せんせん てんししゅおよ まんまん てんし およ
 くるを 甘じ給えり、然れども千千の天使首及び萬萬の天使、ヘルヴィム及
 びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼を具うる者は爾の
 まえ た 前に立ちて、)

司祭) 凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、

司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我等も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、聖なる哉、至聖

なる哉、爾と爾の獨生子と爾の聖神、聖なる哉、至聖なる哉、爾の

こうえい いげん なんぢ なんぢ せかいし なんぢ せいしん せい かな しせい かな なんぢ の
光榮は威嚴なり、爾は爾の世界を愛して、爾の獨生子を賜うに至り、

およ これ しん もの ちんりん まぬか えいせい え かれきた およ われら
凡そ之を信する者に沈淪を免れて永生を得せしむ、彼來りて、凡そ我等

お ていせい せいぜん わた よ ただ い みづか おのれ せかい いのち
に於ける定制を成全し、付されし夜、正しく言えば親ら己を世界の生命の

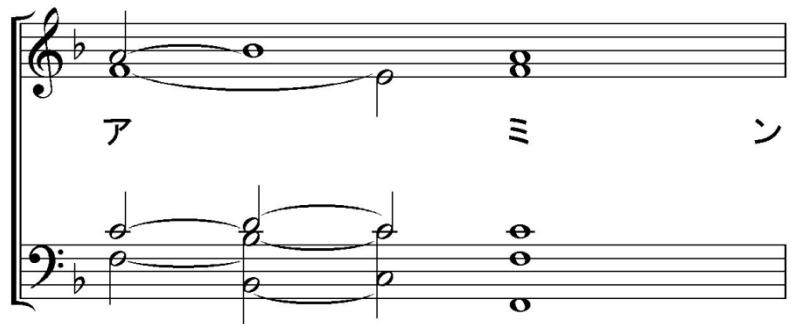
ため わた よ そのせい しじょうむてん て パン と かんしゃ しゅくさん
爲に付しし夜、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、感謝し、祝讃し、

せいせい さ そのせい もんとおよ しと あた い
成聖し、擘きて其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、)

司祭) 取りて食え、是我が體、爾等の爲に擘かるる者、罪の赦を得るを致す、

司祭) (黙誦: 同く晩餐の後に爵を執りて曰く、)

司祭) みなこれのこれわれしんやくちなんぢらおよおおひとためながものつみゆるし
得るを致す、



司祭) (黙誦: 故に我等此の救を施す誠、及び凡そ我等の爲に有りし事、即十
じかはかだいさんじつふくかつてんのぼことみぎざことこうえいさいどこうりん
字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の降臨
を記憶して、)

司祭) なんちたまもの なんちしょぼく しゅうためいつさいためなんちたてまつ
爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、

司祭) (默誦: 我等復爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願い祈り切に求む、爾の

せいしん われらおよ こ そな さいひん つかわ たま
聖神を我等及び此の食えたる祭品に遣し給え、)

司祭) (黙誦: 第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ
り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、潔

こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま
き 心を我に造り、正しき 灵を我の衷に改め給え、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と
第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ
り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、我を爾の

かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか
顔より逐うこと勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐること勿れ、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と
第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた
り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、)

司祭) 此の餅を將て、爾のハリストスの尊體と成し、アミン。

こ しゃくちゅう もの もつ なんぢ そんけつ な
此の爵中 の者を將て、爾のハリストスの尊血と成し、アミン。

なんぢ せいしん もつ これ へんか
爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

(默誦: 願くは此は領くる者の爲に、靈の警醒となり、諸罪の赦となり、爾

せいしん たいごう てんごく え なんぢ お ゆうかん しんあん
が聖神の體合となり、天國を得ることとなり、爾に於ける勇敢となり、審案

あるいは定罪とならざらんことを、

また れいち ほうじ しん もつ ねむ げんそ れつそ たいそ よげんしや しと
又この靈智なる奉事を、信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・

でんどうしや ふくいんしや ちめいしや ひょうしんしや せつせいしや およ よよ しん もつ おわ
傳道者・福音者・致命者・表信者・節制者、及び凡そ信を以て終り

ぎ たましい ため なんぢ けん
し義なる 灵の爲に爾に獻ず、)

司祭) こと しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢょ えいていどうぢょ
特に至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ

リヤの爲、

【 常に福 】 ヴィタニイク
※祭日に他の「生神女の歌」を歌う例あり

つねにさいわいにしてまったくきずなき
 常福全瑕

しょうしんじゆんぢよ、わがかみのはなるな爾
 生神女吾が神母はなるな爾

さいわいなりとと称のうるはま眞ことにあた
 福稱うるはま眞ことにあた

れり。
 れり。

ヘルゲムよりと尊うとく、セラフムにならびなくさ榮
 ルゲム尊うとく、セラフムならびなくさ榮

かえ、みさお操をや壊ぶらずしてかみとば
 え、みさ操をや壊ぶらずしてかみとば

司祭) (黙誦: 聖預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讃美たる聖使徒、及び爾が
 諸聖人の爲に獻ず、神よ、彼等の祈禱に因りて我等を顧み、並に凡そ
 永生の復活の望を懐きて寝りし者を記憶して、彼等を爾が顔の光
 の照す所に安息せしめ給え、
 又爾に禱る、主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正教者の凡の
 主教品、凡の司祭品、ハリストスに因る輔祭品、及び悉くの神品を記
 憶せよ、
 又此の靈智なる奉事を、全世界の爲、聖・公・使徒の教會の爲、潔淨
 にして尊く生を度る者の爲、我が國の天皇及び國を司る者の爲に
 爾に獻ず、主よ、彼等に泰平の國政を賜え、我等も彼等の平和により、凡
 の敬虔と潔淨とを以て、恬静安然にして生を度らんが爲なり、)
 司祭) しゆ こと きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう きおく
 主よ、殊に教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィムを記憶し、
 彼を平安・無難・尊貴・壯健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳う
 る者として、爾の聖なる教會に與え給え、



司祭) 黙誦：主よ、我等が居る所の此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中に
おるものきおく しゅこうかい ものりょこう ものやまい うれ ものかんなん
居る者を記憶せよ、主よ、航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難
あものとりこ ものおよかれら すくい きおく しゅなんぢ しょせいどう
に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖堂
ものたてまつ ぜんぎょう おこな ものおよひんしゃ きねん ものきおく およ
に物を獻り、善業を行う者、及び貧者を記念する者を記憶し、及び
われらしゅうじん なんぢ あわれみ たま たま
我等衆人に爾の憐を垂れ給え、)

司祭) 並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を讃榮
さんしょう たま いま いつ よよ
讃頌するを賜え、今も何時も世世に、



司祭) ねがわ おおい かみ わ きゆうしゅ あわれみ なんぢしゅうじん とも あ
願くは大なる神、我が救主イイススハリストスの憐は、爾衆人と偕に在ら
んことを、



【増聯禱】

司祭) 我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、

司祭) すでに獻けられ及び聖にせられし 尊き祭品の爲に主に禱らん、

司祭) ひとを愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香とし
て享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、

司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが爲に主に禱らん、

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、

司祭) 此の日の 純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、

司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む

司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

しゅ
主
た
賜
ま
え
よ

司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ
主
た
賜
ま
え
よ

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の終がハリストニアニに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ
リストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、

しゅ
主
た
賜
ま
え
よ

司祭) しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのの み もつ ならび
信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并
に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ
主
な
爾
ん
ぢ
に

司祭) (黙誦: ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが
人を愛する主宰よ、我等は我が悉くの生命と望とを爾に委ねて、願い

いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ
 祈り切に求む、我等に、淨き 良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、

こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち なだめ
 此の聖せられたる屬神の筵に與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、

せいしん たいごう てんごく しきょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるいは ていざい
 聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪

いた たま
 とならざるを致させ給え、)

【 天主經 】

司祭) しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま
 主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、

て 天 んに 在 い ま す わ 我 れ ら 等 の ち 父 ち よ ,

ね願 がわくはなんぢのなはせせいとせられ、なんぢの爾

くにはき來たり、なんぢのむ旨

わるるがごとくち地にもお行こなわれん、わ我

がにちようのか糧てをこんにちわれらにあたえた給
 まえ、われらにお債いめあるものわ我
 れらゆるすがごとく、われらのにお債い
 めをゆるした給まえ、われらをいざない
 にみちびかず、な猶おわれらをきょうあ
 くよりすくいいた給まえ、

司祭) 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



司祭) 衆人に平安、

Musical notation for the phrase "なんちのし神んにも。". The soprano part (top line) has notes on the first, second, and third lines. The basso continuo part (bottom line) has notes on the first, second, and third lines.

司祭) 爾等の首を主に屈めよ、

Musical notation for the phrase "しゆな爾んちに。". The soprano part (top line) has notes on the first, second, and third lines. The basso continuo part (bottom line) has notes on the first, second, and third lines.

司祭) (黙誦: 見る可からざる王、其量り難き能力を以て萬有を畫定し、其慈憐の多

きを以て萬物を無より有となしし主よ、我等爾に感謝す、主宰よ、爾親

ら爾に首を屈めし者を天より顧み給え、蓋血肉に屈めしに非ず、

すなわちなんぢおそかみかがゆえしゅさいなんぢここそなものわれ乃爾畏るべき神に屈めり、故に主宰よ、爾は此に奠えたる者を、我

らしゅうじんぜんためかくじんひつようおうひとしわかこうかいものとも等衆人の善の爲に、各人の必要に應じて等く頒ち、航海する者と偕に

こうかいりょこうものともりょこうれいたいいしやまいうれもの航海し、旅行する者と偕に旅行し、靈體の醫師として、病を患うる者を

いやたま醫し給え、)

司祭) なんぢどくせいしおんちょうじれんじんあいよなんぢかれしせいしせんいのち爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命

ほどこ なんち しんとも さんよう
を施す爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世世に

A musical score for two voices (Soprano and Bass) and continuo. The vocal parts sing 'アミン、アミン。' The continuo part consists of sustained notes on the bass line.

司祭（黙誦：主イイススハリストス我等の神よ、爾の聖なる住所と爾が國の光榮の寶

ざ かえり たま うえ ちち とも ざ ここ み われら とも お もの
座より 倉み給え、上には父と偕に坐し、此には見えずして我等と偕に居る者よ、

きた われら せい なんち けんのう て もつ なんち しじょう たい しそん ち
來りて我等を聖にし、爾の權能の手を以て、爾が至淨の體と至尊の血とを

われら さづ またわれら もつ しゅうじん さづ たま
我等に授け、又我等を以て衆人に授け給え、）

司祭（謹みて聽くべし、聖なる物は聖なる人に、

A musical score for two voices (Soprano and Bass) and continuo. The vocal parts sing '聖いなるはただひとり、しゅ主なるはただひとり' and 'とり、か神みち父のこのこうえ榮いをあらわすの'.

A continuation of the musical score for two voices and continuo. The vocal parts sing 'イイススハリストスなり、アミン。' and 'とり、か神みち父のこのこうえ榮いをあらわすの'.

A continuation of the musical score for two voices and continuo. The vocal parts sing 'イイススハリストスなり、アミン。' and 'とり、か神みち父のこのこうえ榮いをあらわすの'.

司祭（黙誦：神の羔は剖かれ分たる、彼は剖かれて分離せず、恒に食われて永く盡きず、

すなわちうものせい
乃領くる者を聖にす、）

レーベント
※信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

(奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下を句としてアンティフォン形式で歌う。若しくは誦經する。)

本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。

日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス(其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等)、ステイヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。)

【 領聖詞 第148聖詠 】

句) そのことごとくの天使よ、かれを讃め揚げよ、そのことごとくの軍よ、かれを讃め揚げよ。

句) 日と月よ、彼を讃め揚げよ、悉くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。

句) 諸天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。

句) 主の名を讃め揚ぐべし、蓋彼言いたれば、即成り、命じたれば、即造られたり、かれは之を立てて世世に至らしめ、則を與えて之を踰えざらしめん。

句) 地より主を讃め揚げよ、大魚と悉くの淵、火と霞、雪と霧、主の言に従う暴風、

山と悉くの陵、果の樹と悉くの柏香木、野獸と諸の家畜、匍う物と飛ぶ

鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年と處女、翁と童は、主の名を讃

め揚ぐべし、蓋惟其名は高く擧げられ、其光榮は天地に徧し。

句) 彼は其民の角を高くし、其諸聖人、イズライリの諸子、彼に親しき民の榮を高くせり。

【 信徒領聖 】

司祭) 神を畏るる心と信とを以て近づき來れ、

全員) しゅわれしんかうみとなんぢじつを實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが爲るしゅは神みなりわれらを照らせり。世に來りし者となす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃爾が至淨の體、此れは乃爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並に我にていざいなんぢしじょうきみつうつみゆるしえいせいえたまいたたま定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ給え、アミン。

かみこいまわれなんぢきみつえんあづかものいたまけだしわれなんぢあだきみつ神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機密

つを告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る爾の聖なる機密を領くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、

【(大パスハ) 領聖詞】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。

ハリストスのせいたいをうけ、ふしこのいづみ
をのめよ。

司祭) (黙誦: ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を拜むべし、ハリ

われらなんぢじゅうじかおがなんぢせいふくかつうたほなんぢわれ
ストスよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾は我

らの神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、皆

きて來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて喜は全世界に臨

めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架に釘

うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、

あらた新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオン

いまいわたのしなんぢいさぎよしょうしんぢよなんぢうしゆふくかつ
よ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を

よろこたま
歡び給え、

ああおおいしせい
嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、

なんぢくにくひおいわれらなおしたしなんぢうたま
爾が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しょせいじん きとう よ ここ きおく
 主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せ
 られし者の諸罪を滌い給え、
 ひと あい しゅさい わ たましい おんしゆ われら こ ひ おい なんぢ てん
 人を愛する主宰、我が靈の恩主よ、我等に、此の日に於ても、爾が天
 じょう ふし きみつ う たま なんぢ かんしや われら みち なお われら
 上の不死の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、我等の途を直くし、我等
 しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かた
 衆人を爾を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩を固
 たま こうえい しょうしんぢよ えいていどうぢよ よ なんぢ しょせいじん いのり
 め給え、光榮なる生神女・永貞童女マリヤ及び爾が諸聖人の祈と
 ねがい よ
 願とに因りてなり、)

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができるから「アリルイヤ」を歌う。

アリル イヤ アリル イヤ アリル イヤ

司祭) 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、

わ我れらすでにまことのひかりをみ觀てんの天

せいしんをう受けただしきしんをえ得て

司祭) (黙誦: 神よ、願くは爾は諸天の上に擧げられ、爾の光榮は全地を蔽わん、我等の神は恒に崇め讃めらる、)

司祭) 今も何時も世世に、

なんぢ我れらに、しんせいにしてふしなるい生
爾我等に、神聖にして不死なるい生

のち命をほどこすなんぢのせいき機み密つを
のち命をほどこす神聖の機密を

うくるをゆるせばなり、い祈のるわれらを
うくるをゆるせばなり、祈のる我等を

なんぢのせいせいにま護もり、しゆうじ日つなんぢ
爾成聖にま護もあり、終日つなんぢ

のぎをならわしめたまえ、
のぎをならわしめたまえ、

アリルイヤアリルイヤアリルイヤ
アリルイヤアリルイヤアリルイヤ

司祭) つつしだして、しんせい・しじょう・ふし・いのち・ほどこ・てんじょう・おそせい
謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖

きみつう よろしゅかんしや
機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、

しゅあわれめよ しゅあ憐めよ

司祭) かみなんぢおんちょうもつわれらたすすくあわれまも
神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救い憐み護れよ、

司祭) こひじゅんぜんせいせいへいあんむざい もとわれらおのれみおよたがいおのの
此日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に各

みもつならびことごとわれらいのちもつ かみいたくせん、
の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅなんぢに

司祭) けだしなんぢわれらせいせいわれらこうえいなんぢちちこせいしんけんいまいつよよ
蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世

に、

アミニアミン

司祭) へいあんい平安にして出づべし、

しゅのなにによりて

司祭) しゅいの主に禱らん、

なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく
司祭) 爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救い、
 およ なんぢ しきょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び あいす
 及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充満を守り、爾が堂の美なるを愛す
 もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの もの のこ
 る者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む者を遺
 なか なんぢ せかい なんぢ しょきょうかい しょしさい わくに てんのうおよ くに つかさど もの
 す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を司る者
 およ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび たまもの うえ
 及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる賜は、上
 より、なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち こ せいしん けん
 より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と子と聖神に獻
 ず、いま いつ よよ
 す、今も何時も世世に、

誦經 我何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が靈は主を以て誇らん、温柔なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇め讃めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免れしめたまえり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の貧しきものよ者呼びしに、主は聆き納れて、之を其悉くの艱難より救えり。主の使は主を畏るるものめぐまもかれらたすあぢわしういかじんじみかれたのひと福なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏しきことなし。少しあとぼうただしゅたづものなんこうふくか獅子は乏しくして餓え、唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

司祭 (黙誦：親ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制を悉く成満せしハリストス我が神よ、常に我等の心を喜びと樂とに成満せしめ給え、
 いまいつよよ今も何時も世世に、)

司祭 ねがわくは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も世世

に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP47【 永眠者の爲の熱衷祈禱 リティイヤ 】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) ハリストス神 我等の 恃 よ、 光榮は 爾 に歸す、 光榮は 爾 に歸す、

司祭) 死より復活せしハリストス我等の 真の神は、 其至淨なる母、 光榮にして讃美たる聖

使徒、 我等の聖神父コンスタンチノーポリスの大主教聖金口イオアン、 克肖捧神な

わがしょしんぶ わほん あしとだいしゅきょうせい せい ぎ かみそふば
る我諸神父、 (某) 日本の亞使徒大主教聖ニコライ、 聖にして義なる神の祖父母イ

およ しょせいじん きとう より われら あわれ すぐ かれ ぜん ひと
オアキム及びアンナ、及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん、彼は善にして人

を愛する主なればなり、



【 萬壽詞 】

Musical notation for the first part of the hymn. The top staff (G clef) has lyrics: "か 神 み よ わ 我 が 国 に の てん の 皇 う お 及 よ び". The bottom staff (F clef) has lyrics: "く に を つか さ ど る も の". The music consists of quarter notes and eighth notes.

Musical notation for the second part of the hymn. The top staff (G clef) has lyrics: "く に を つか さ ど る も の". The bottom staff (F clef) has lyrics: "國". The music consists of quarter notes and eighth notes.

Musical notation for the third part of the hymn. The top staff (G clef) has lyrics: "わ れ ら の ふ しゅきよ う セ ラ フィ ム、 お 及 よ び こ 悪 と ご と". The bottom staff (F clef) has lyrics: "我 等 の 府 主 教". The music consists of quarter notes and eighth notes.

Musical notation for the fourth part of the hymn. The top staff (G clef) has lyrics: "く の せ い き よ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ル ら を い く と 壴". The bottom staff (F clef) has lyrics: "正 教". The music consists of quarter notes and eighth notes.



(祈祷終了、十字架接吻)

いくとせ
【 幾歳も 】

A musical score for two voices (SSAA or SATB) and piano. The score consists of three staves. The top staff has a soprano vocal line with lyrics 'いくとせ くと歳 せも い幾 も' repeated. The middle staff has an alto vocal line with lyrics 'と歳 せも い幾 も' repeated. The bottom staff has a bass vocal line with lyrics 'い幾 くと歳 せも' followed by a piano part. The music includes various dynamics like forte, piano, and sforzando, and rests.

【 永眠者の爲の熱衷祈祷 リティイヤ】

ひとをあいするきゅううせいしゆよしじ死せしひんじん

のたましいとともになんちがぼくひ婢のたま靈

しいをやすんぜしめてかれらをなんちにあ在

るふくらくのい生のち命にま護もりた給ま

しゆよなんちがしょせいいじんのあんそくするところ

に なんぢがぼくひ婢のたましいをやすんぜしめた給
 爾 爰 僕 婢 靈 安 息 紗 神 給

まえ なんぢひひとりひとをあいするしゅなれば
 爰 爰 獨 人 人 愛 事 主 は

な り
 り

こ光うえ榮いはち父ちとことせ聖いしんにき歸す
 光 荣 父 子 聖 神 歸 す

なんぢはぢ地獄にくにくだりてつながれしもののか鎖
 爰 地 獅 く に 降 繫 な が れ し 物 の 鎖

さりをときたるか神みなりみづからなんぢ
 釋 神 み な り み づ か ら な ん 爻

が ぼ 僕 く ひ 婢 の た 霊 ま し い を やすんぜ し め た 給 ま

え

い ま も い 何 時 も よ 世 よ に ア ミ ン

ひ 獨 と り い 潔 さ ぎ よ く き 瑕 づ な き ど 童 う て 貞 い ち ょ た 種 ね な

く し て か 神 を う み し も 者 の よ か 彼 ら 等 の た 霊 ま

し い の す く わ れ ん こ と を い の り た 給 ま え

【 重聯禱 】

司祭) 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

しゅあ憐われめしゅあ憐われめしゅあ憐われめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 又寝りし神の僕婢(某)の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざる罪の

ゆる赦されんが爲に禱る、

しゅあ憐われめしゅあ憐われめしゅあ憐われめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、

しゅあ憐われめしゅあ憐われめしゅあ憐われめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 彼等に神の憐と天國と諸罪の赦とを賜わんことを、ハリストス我死せざる王及

び神に願う、

しゅたまえよ。
主 賜

司祭) 主に禱らん、

司祭) もろもろ れいしん もろもろ にくたい かみ し ほろ あくま むなし なんぢ せかい いのちを
たま しゅ なんぢみづか ねむ なんぢ ぼくひ たましい ひか ところ しげ くさば へい
賜いし主よ、爾 親ら寝りし爾の僕婢(某)の靈を光る處、茂き草場、平
安の處、病と悲と歎との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する神な
よりかれら あるいは ことば あるいは おこない あるいは おもい おか ことごと つみ ゆる たま
るに因て彼等が或は言、或は行、或は思にて犯し悉くの罪を赦し給
けだしひとひとり い つみ おこな もの ただなんぢ つみ なんぢ ぎ えいえん ぎ
え。蓋人一も生きて罪を行わざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠の義、
なんぢ ことば しんじつ けだし われら かみ なんぢ ねむ なんぢ ぼくひ
爾の言は眞實なり。蓋ハリストス我等の神よ、爾は寝りし爾の僕婢(某)
ふくかつ いのち あんそく われらこうえい なんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん いのち
の復活と生命と安息なり。我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を
ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ
施す爾の神とに獻ず、今も何時も世世に、

【 永眠者の爲のコンダク 】

をしよせ聖いじんとと偕もにや疾まい

もかなしみもな歎げきもなくただお終

わりなきい生のち命のあると處ころにやすん

ぜしめた給まえ

司祭) かみわれらたのみこうえいなんぢきこうえいなんぢき
ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こ光うえ榮いはち父ちとことせいしんにき歸す、いまも

い何つもよ世よ世にアミンしゅ主あ憐われめしゅ主あ憐われ

めしゅあわれ めよ、ふくをくだ
主憐 れしものそのぜんのうてたもたま
せ

司祭) 死より復活し、生ける者と死せし者を其全能の手に保ち給うハリストス我等の眞の

神は、其至淨なる母、光榮にして讃美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、

(某) 日本の亞使徒大主教聖ニコライ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及び

アンナ、及び諸聖人の祈禱に因て、寝りし僕婢(某)の靈を諸義人の住所に入れ、

アヴラアムの懷に安んぜしめ、諸義人の列に加え、及び我等を憐み救わん、彼は善

にして人を愛する主なればなり、

アミン。

司祭) 主よ、爾の僕婢(某)の福なる寝に永遠の安息を與え、彼等に永遠の記憶を爲し給え、

え永遠の記憶を爲し給え、

お憶く、え永遠の記憶を爲し給え、

【 ばんじゅし
萬壽詞 】

か神みよ わ我がくにのてんの皇うお及よび

くにをつかさどるもの

われらのふしゅきょうセラファム、お及よびこそ悉

くのせいきょうのハリストニアニンらをいいくと歳

にもま護もりたまえ

(祈祷終了、十字架接吻)

【 領聖感謝祝文 】

神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか もの
主我が神や、爾我罪人を棄てずして、尚爾の聖なる機密に與る者
いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う ゆる
と致させ給うを爾に感謝す、我堪えざる者に爾が至淨なる天の賜を受くるを容し
たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ われ たましい からだ
給うを爾に感謝す、主宰・人を愛する主、我等の爲に死して復活し、我が靈と體
おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち ほどこ きみつ たま もの
とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を施す機密を賜いし者
もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき がい か われ こころ め あきら
や、求む此の機密は、我にも靈と體とを癒し、凡の敵の害を驅り、我が心の目を明
かれ たましい ちから へいあん はぢ え しん いつわり あい えいち み
かにし、我が靈の力を平安にし、耻を得ざる信とし、偽なき愛とし、睿智を充たし、
なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちょう まも なんぢ くに つ もの
爾の誠を守らしめ、爾が神聖の恩寵を益し、爾の國を嗣がしむる者となるを得せ
たま われ か ごと こ きみつ なんぢ せいせい まも つね なんぢ おんちょう おも
しめ給え、我は此くの如く、是の機密にて爾の成聖に護られ、常に爾の恩寵を思い、
またおのため せいかつ すなわちなんぢわ しゅさいおよ おんしゆ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ
復己が爲に生活せず、乃爾我が主宰及び恩主の爲に生活し、以て永生の望を
いだ こ よ はな えいえん いこい か しゆく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い
懐き、此の世を離れて、永遠の息、彼の祝する者の絶えざる聲、及び爾が顔の言い
つく びぜん み もの かぎ たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ
盡されぬ美善を見る者の限りなき樂の處に至らん、蓋ハリストス我が神や、爾は
なんぢ あい もの まこと のぞみ い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ
爾を愛する者の眞の望と言い盡されぬ樂なり、凡そ造を受けし者は爾を世世に讃
うた め歌う、「アミン」

【 第二祝文 聖大ヴァシリイの原文 】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ
主宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、
およ われ たま ところ しょせん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま なんぢ
凡そ我に賜いし所の諸善、且生命を施す至淨なる爾の機密を領けさせ給いしを爾
かんしゃ またなんぢ いの ぜん ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した なんぢ つばさ
に感謝す、又爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を爾が庇の下に、爾が翼
かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ とうぜん なんぢ せいたい
の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、潔き良心を以て、當然に爾の聖體
せいいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだしなんぢ いのち かて せいせい
聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、蓋爾は生命の糧、成聖の
いづみ しょせん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい けん いま いつ よよ
泉、諸善を賜う主なり、我等爾と父と聖神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、「ア
ミン」

【 第三祝文 聖シメラン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゃ あまん おのれ み かて
我が造成主、甘じて己の身を糧とし
われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしょせつしんぶく
て我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃吾が百體諸節心腹

い　わ　しょさい　とげ　や　たましい　きよ　おもい　せい　すじ　ほね　かた　ごかん　あきら
に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を明か
わ　ぜんしん　なんぢ　おそ　おそれ　くぎ　つね　われ　おお　われ　たも　われ　たましい　がい
にし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を靈を害
もろもろ　おこない　ことば　まも　われ　きよ　われ　あら　われ　かざ　われ　おさ　われ　ひら
する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾り、我を治め、我を啓
われ　てら　わ　またみ　すまい　ひとりなんぢ　せいしん　すまい　あらわ　およそ　あくしゃ
き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯し、凡の惡者
およそ　よく　われせいたい　い　よ　なんぢ　いえ　もの　に　ひ　に　ごと
凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐること、火より逃ぐるが如く
たま　われそのてんたつしや　もろもろ　せいじや　しょひん　しんし　なんぢ　ぜんく　ちえ　しと
ならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前驅、智慧なる使徒、
およ　なんぢ　むてんしじょう　はは　なんぢ　すす　じれん　しゅわ　かれら　きとう　い
及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の祈禱を容れて、
なんぢ　えきしや　ひかり　こ　たま　けだしひとりしぜん　しゅ　なんぢ　われら　たましい　せいせい　こう
爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の靈の成聖と光
みよう　われらみなみ　しゅさい　よろ　ところ　ごと　ひび　こうえい　なんぢ　けん
明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日日に光榮を爾に獻ず、

【第四祝文】　しゆ　われら　かみ　ねがは　なんぢ　せいたい　わ　ため　えいせい
主イススハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に永生
なんぢ　そんかつ　つみ　ゆるし　ねがわ　こ　かんしや　まつり　わ　ため　きえつ　そうけん
となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悦と壯健
あんらく　またおそ　べ　なんぢ　さいど　こうりん　とき　われざいにん　なんぢ　こうえい　みぎ　た
と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の右に立つ
え　たま　なんぢ　しじょう　はは　しょせいじん　きとう　よ
を得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人ととの祈禱に依りてなり、

【第五祝文　至聖生神女に捧ぐ】　しせい　ちよさい　しょうしんぢよ　わ　くら　たましい　ひかり
至聖なる女宰・生神女、我が昧みたる靈の光、
わ　たのみ　おおい　かくれが　なぐさめ　よろこび　なんぢ　われた　もの　なんぢ　こ　しじょう　たいしそん
吾が憑恃と帡幪と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の體至尊
ち　う　もの　え　たま　なんぢ　かんしや　なおいの　まこと　ひかり　う　もの
の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生みし者や、
わ　こころ　れいもく　あきらか　ふし　いづみ　う　もの　われつみ　ころ　もの　い　たま
吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生かし給え、
じれん　かみ　じあい　はは　われ　あわれ　わ　こころ　しょうかん　ひつう　わ　おもい　けんそん　わ　とりこ
慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に謙遜、吾が虜
いねん　よびかへし　たま　われ　いき　た　いた　つみ　え　しじょう
となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲ずして、至淨なる
きみつ　せいせい　う　たましい　からだ　いやし　う　いた　ならび　われ　つうかい　うけとめ　なみだ
機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、並に我に痛悔と承認との涙
あた　しようがいなんぢ　かしようさんえい　たま　けだしなんぢ　よよ　さんび　こうえい　み　こうむ
を與えて、生涯爾を歌頌讚美せしめ給え、蓋爾は世世に讃美と光榮とを満ち被
る、「アミン」